

月刊  
中東レポート

## ユダヤ人「移民」問題と

### アラブ・パレスチナ

一九九〇年二月一〇日

現在、ソ連をはじめとする社会主義諸国の激

変が急速に展開しているなかで、「アラブーイ

スラエル紛争」の動向に大きな影響を与えるも

のとして、ソ連系ユダヤ人のイスラエルへの大

量「移民」問題が焦点になっている。PLOを

はじめとして、アラブ各国は、被占領地に「移

民が入植する」ことに、強く抗議している。

さらに、チェコスロバキアがイスラエルとの

国交を回復し、アラブ諸国に対する武器売却を

停止するとの立場を明らかにした。続いて、東

独も、一月二九日、コペンハーゲンで、イスラ

エルとの外交関係の樹立にむけた正式協議を開

始した。

被占領地パレスチナにおいては、蜂起の闘い

は、非妥協に継続されているが、蜂起をとりま

く客観条件の変化に対応していくことが問われ

始めている。

東欧の再編過程の激動、帝国主義の市場再分

割戦のなかで、政治的に孤立化していたイスラ

エルの位置が変化し始めた。東欧諸国、アフリ

カ諸国等が、イスラエルとの経済関係の強化を

求めており、また、ソ連系ユダヤ人「移民」が

大量にイスラエルに流入し始めた。蜂起の二年

間の闘いは、イスラエルの政治的孤立化を作り

## 第54号

発行 ウニタ書舗  
東京都千代田区神田神保町1-52  
TEL. (03) 291-5533  
編集 J.R.A.  
郵便振替 東京1-48443  
三菱銀行神保町支店 当座9012656  
会員制 年会費24000円

- 目次
- ユダヤ人「移民」問題とアラブ・パレスチナ
  - 資料
  - ・ユダヤ人「移民」問題への反応
  - ・統一指導部アピール（抄訳）
  - ・蜂起の二年間—一九九〇年代に向けて
  - ・レバノン問題資料
  - 重要日誌（一九九〇年一月一一日）
  - 二月一〇日）：
  - 18

### — ソ連系ユダヤ人大量「移民」の影響

昨年の二二月から、月四〇〇〇〇人から五〇〇〇人の単位で、イスラエルへのソ連系ユダヤ人の大量流入が始まった。一般には、ソ連がユダヤ人の出国制限を大幅に緩和し、その大半が米国行きを希望するのに対し、米国は、昨年秋から、受け入れ規制策をとったのが、イスラエルへ大量の「移民」が流入する原因とされている。

しかし、米帝のソ連への要求としてあったのは、人権問題としての出国規制緩和であつた。また、マルタ会談においても、ブッシュ大統領は、イスラエルを人種差別主義とする国連決議の撤回にむけて、ソ連の協力を求めたとされている。

いずれにしても、ソ連が国内再編の一環として、出国規制を緩和したのは事実である。その理由は、第一に、経済再編の要求としてある西側資本、技術の導入にむけて、ヘルシンキ宣言の実行に移ったのである。これは、ユダヤ資本の圧力（世界シオニズム）であり、ソ連、東欧諸国は、それを求めている。

第二に、ユダヤ人問題が、新たな民族問題に

拡大していく要素となつていくだろう。

ある統計によれば、現在の「大イスラエル」つまり、イスラエル内部と被占領地（西岸、ガザ、ゴラン）の人口比率は、ユダヤ人が三七〇万人で、アラブ人が二二〇万人である。六〇%強がユダヤ人だということになる。西岸、ガザで見ると、ユダヤ人が六〇万人、パレスチナ人が一四〇万人である。そして、イスラエルは、ソ連系ユダヤ人の大多数は、イスラエル内部に定着するのであって、被占領地への定着はごく少数であると強調している。しかし、被占領地からの撤退に反対する勢力が、「大イスラエル」の人口比率が維持されてきたのは、ソ連系ユダヤ人が一四〇万人である。現在展望されているソ連系ユダヤ人の「移民」がくれば（むこう六、七年間に、七五万人とされる）、二〇年間は、人口比率を維持できると主張しているように、シオニストにとって、人口比率問題は死活問題なのである。

シオニストは、世界シオニズムの圧力によって、ソ連からの大量的「移民」政策をここでした戦略的延命を計っている。それは、蜂起の実力解体策動の一環であると同時に、構造の再編をも狙うものである。

これまで、イスラエルは、蜂起が独立と民族的権利を要求しているのに対し、「選挙」を対置してきた。さらには、「選挙」についての直接交渉についても、PLOを排除したパレスチナ代表団を要求している（政府としての立場は、リクードの主導による）。これが、ベーカーが仲介した米、エジプト、イスラエル外相会談

体的に領土問題の解決を損なわない限り、イスラエルとの国交回復が、政策上矛盾しないとの立場にあり、それが、今回の「移民」承認の背景となることである。そのもっとも重要な要素は、ゴルバチョフ路線がイデオロギー抜きに、帝国主義との協力によって資本の導入を計ることにある。米帝資本の多くは、ユダヤ資本であり、その問題を解決しなければ、資本、技術を導入することができないのである。

イスラエルとの関係では、一月下旬には、医療機器などの取引合意を行い、ソ連は、イスラエルの技術を導入し始めた。イスラエルは、経済関係をここに、アルメニア、アゼルバイジャンからのユダヤ人をイスラエルに「移民」させている。

米帝は、この問題に対してもどのような立場をとっているか？ 一月一四日、シャミールが、「大規模な移民には、大イスラエルが必要だ」と発言したのに対して懸念を表明するなど、政治的には、あくまでも、ベーカー提案によるイスラエル一ペレスチナ直接交渉を進める立場を保っている。そして、公式には、「大イスラエル構想」反対の立場を変えていない。しかし、現実には、ソ連からのユダヤ人移民の受け入れを規制しているので、ユダヤ人移民は、イスラエルに流入する以外、行き先がない。

このことは、第一に、米帝は、ソ連系ユダヤ人の移住を承認しつつ、米国への受け入れを規制している。ソ連が、アラブとの関係を重視せず、国内経済再編に重点をおいていることを利

用して、世界シオニズムが背景となって、米国への移民規制を行つてるのである。  
第二に、イスラエルの入植村への移住政策を非難することで、アラブに対する体面を保ち、直接交渉へのヘゲモニーを握っていくことによる。

ブッシュ政権としては、アラブ一イスラエル統合支配という米帝の基本政策を維持しているが、シオニスト・ロビーの強力な米議会は、先月の報告にあるように、イスラエルに対する補足援助を決定している。

現在の米帝の世界戦略の重点は、社会主義諸國への経済介入の強化によって、社会主義の解体と資本主義化に置いている。そのため、海外援助の最大は、年間三〇億ドルを受けるイスラエル、二〇億ドルを受けるエジプトである。

このことは、中東に最大の軍事援助を行つてきることを維持しつつ、経済的援助を、帝国主義にとってより戦略的な重点からみて、再編していくことを意味している。それは、イスラエルへの援助カットは、米帝の中東政策に反対するシャミール政権への圧力という一時的なものではなく、恒常的なものの第一段階といえよう。

それは、新たなイスラエル一米帝の矛盾として立場を利用して、市場を獲得していくこうとしている。

したがって、リクードと労働党は、戦略において相違があるのではない。本質的に、人種主義、領土拡張にかわって、リクードの指導者の地位を狙っている。シャミールは、「移民」問題をここに、一方では、「選挙」を掲げて、蜂起の解体を狙っている。「西岸、ガザは、イスラエルの土地である」とか、「ユダヤ人は、イスラエルのどこにでも入植する権利がある」との発言を繰り返しているが、被占領地を手放さない路線は、シャロンと変わるものではない。

リクードと労働党は、戦略において相違があるのではない。本質的に、人種主義、領土拡張の経済、技術介入の争奪戦に食い込むことを狙っている。その焦点は、やはり、国内経済再編によって対応するのかについてである。冷戦構造が解体されつつあるなかで、とくに、東欧への技術をここに米、欧州、日帝国主義とは独自の立場を利用して、市場を獲得していくこうとしている。

したがって、リクードと労働党は、政治的孤立化の段階から次の段階に向けて、国内世論をどちらがひきつけるのかに集中した展開を見せている。その焦点は、やはり、国内経済再編にあり、その問題を、「移民」問題とは別個に行なうとしている。ペレスの提案した九〇年度国家予算案には、「移民定着」予算が少ない。これは、世界シオニストの財政援助によるものであることがわかる。

人民にとつて、この「移民」は、独立への妨害、民族自決権への侵害でしかない。アラブ諸国の反応は、「一言では、危機感と言えよう。先に述べたアラブ連盟顧僚評議会では、ソ連系ユダヤ人の移民問題に関して、ソ連への抗議を決定した。総体の方向としては、イスラエルとの共存に踏み切ったものの、イスラエルの側は、占領地の返還に応じないばかりか、ユダヤ人人口を増やそうとしている。これは、現在の「紛争」を新たな地平に押し上げるものとなるだろう。

蜂起から目をそらせるという戦術的な側面よりも、シオニストは、「移民」問題を蜂起解体に向けた戦略的政策の一環として出してきており、それは、また、帝国主義諸国の矛盾を作り出していくものとしてある。そして、アラブ諸国レベルでも、戦術レベルにおいて、対イスラエル政策の統一した動きを作り出している。「入植政策」を解体していく闘いは、シャミー

まず、一月一五日には、アラブ「トロイカ」が、安定化の進行状況に関して会談を行った。そこでは、安定化の阻害になっているのは、アウンの頑強なタイフ合意拒否であることを確認し、カ月以内にアラブ緊急サミットを開催するよう勧告することで一致したとされる。すでに、カサブランカ・サミットで規定された六カ月の期間内に、タイフ合意の調印をみた。その実行過程で、アウンの反対によってレバノン安定化の頓挫状況が作られたのを、あくまでも、アラブ・イニシアチブで解決していくことをめざした展開であった。「トロイカ」外相の一人、サウジのフェイサル外相は、この会議後、パリ、ワシントンを訪問し、アウンへの圧力を訴えたという。レバノンの安定化に向けて、アウンの対応が、アラブ・レベルで焦点になつていったのである。

一方、一月一五日は、三者合意に対するレバーニーズ・フォーシーズ内の反乱四周年にあつた。

## セキュリティ・プランの実行と、東ベイ

この記念集会において、司令官ジャジャは、再度「連邦制」を打ち出し、レバノンが直面している三つの敵を打ち負かす方法であるとした。その三つの敵として、第一に分離、第二に一九四三年の国民合意、そして、第三にヘゲモニーの論理を挙げた。アラブ「トロイカ」が、アウンを名指しで、安定化の障害物と批判したときに、ジャジャが、こうした発言を行つたことは、アウンへの政治的攻勢である。アウンの側は、タイフ合意拒否、「分離」案を打ち出しているが、その基本政策はタイフ合意の破棄であり、それ以上には問題の解決方向を提示してはない。とくに、東ベイルートで、国會議員選挙を行うとしたのができずに、無期延期に放置したままである。ジャジャは、「東ベイルートにも、新しい風が吹くべきである」と演説し、「同一の大義を分かち合う兄弟」であるレバノン軍とレバニーズ・フォーシズの団結の必要性を打ち出した。

こうしたなかで、二〇日には、レバノンのバラウイ大統領が、初の外遊として、三日間のシリਆ訪問を行つた。この訪問では、バラウイ大統領に対して、アサド大統領は、安定化にむけた要請に応えることを約束した。そして、レバノン主権の再建の第一歩として、まず、西ベイルートでの民兵の解体、非レバノン人の不法入国阻止のために陸海空のセキュリティ・コントロールを実行することなど、タイフ合意の実行に向けた合意が成立した。その後のインタビューオにおいて、アサド大統領は、アウンを追放するこ

1990年4月15日 第54号 月刊 中東レポート

なかつたら不可能なことであろう。また、民營化を進めて、國營企業とヒスタドルート（労働総同盟）が最大の雇用者である構造そのものを転換させていくなかで、経済の活性化を計ろうとしている。その要は、米帝との関係、そして独自に蓄積してきた軍需産業であろう。

代、四〇年代の東欧系ユダヤ人の大量移民を思起すまでもなく、パレスチナ平和イニシアチブが危険に曝されることは、明らかである。それは、シオニストにとって、人口比率のバランスを維持するというところに軸があるのでなく、「入植」政策の拡大によって、軍事的に力だけでは押さえきれない現状に対して、物質基盤として、被占領地での力関係を変えようとする戦略的なものであるために、危険なのである。

PLOは、ソ連に対して、モスクワーテル・アビブの直航便を止めるよう申し入れた。ソ連も、直航便は止めている。しかし、行き先のないソ連系ユダヤ人は、イスラエルに流入している。被占領地に「定着」する「移民」は数の上で少ないと、イスラエルは主張するが、それは、二義的な問題である。さらに、「移民」は、イソフレ、住宅難などから、実際にはイスラエル国内には「定着」しがたいので、結局、被占領地に流れしていく構造が作られるだろう。なぜなら、イスラエル社会は、歐州系ユダヤ人のアシュケナジが上層を占め、東方系（アラブ系）ユダヤ人のセファルディが低所得層を占めている。そして、建設などの単純肉体労働を担うパレスチナ人が、最下層を占めている。このセファルディの中から、社会問題の解決を優先せよといふ声が強く、アシュケナジであるソ連系ユダヤ人が優遇されることが、新たな社会問題をつくることが予測される。また、ソ連系ユダヤ人を大量に「移民」させた眞の狙いが、蜂起解体されること

PLOは、蜂起の作り出した力関係が、「移民」によって転換させられそうな危険性をみて、アラブの力を動員してこれに対応していくこうとされている。それは、二月七日に、アラブ連盟閣僚評議会が開かれ、「移民」問題での立場を統一したことに並んで、アラファト議長とシリア外相との会談がなされたことに、端的に示されている。この会談では、エジプト—シリアの国交回復で、最後の懸案となっているPLO—シリアの関係改善に向けた動きとして注目された。この会談では、関係改善の条件として、PLOの側は、パレスチナ人拘留者を釈放すること、パレスチナ独立国の承認をシリアに求めたが、合意に至らず、持ち越しになつておき、引き続き、PLO—シリアの関係の動向が注目される。また、DFLPのハワトメ議長は、対イスラエル前線国會議を再開するよう訴えている。ペレスチナ平和イニシアチブで、イスラエルとの共存を追求しようとしている時に、イスラエルの側は「移民」攻勢に出してきた。前線国會議結成の呼びかけは、アラブ・レベルでの統一を媒介に、対イスラエル戦線の足並みを揃えていくために出されてきている。これが、実体化していくか否かは、PLO—シリアの関係改善にかかるといえよう。

被占領地の統一指導部は、アピール五一号においては、直接この問題に触れていない。むしろ、ソ連のPLOへの外交特權の承認を評価していることは、明確である。



とが第一であり、民兵組織が合法的な国家権力の再建を妨げている問題の解決は、その次であるとの立場を打ち出した。

ハラウイ政権は、この会談に先立って、経済相を仮、米に派遣して、支持を取り付けた。米政府は、(西ベイルート) レバノン軍ラブー・ド司令官に対し、装甲車を含むハード・ウェアの売り渡し、将校の米国での訓練に合意していたとされる。米政府が、アラブ・イニシアチブを支持していることが、明確に示された。また、銀行などの財政面での人事を一新し、新体制の発動をうかがわせた。

この会談、そしてアサド大統領の記者会見は、タイフ合意に基づく合法的権威を西ベイルートに再建すること、そして、アウン追放を明確に打ち出した。帰国後の閣議で、ハラウイ政権が、アマル対ヒズボラへのセキュリティ・プランの実行を決定した。五日には、東西ベイルート内部、南部レバノンで再燃した。しかし、その翌日には、アマルのリーダーのナビーハ・ベリと、PSPのジョン・プラットが、セキュリティ・プランの実行に協力することを表明した。南部でのアマル対ヒズボラの対立は、解決はされていないまでも、小康状態に向かっていった。

ヒズボラのみは、セキュリティ・プランの実行を批判して、二月五日になるまで、合意しなかった。これまでに、ヒズボラは、ベカのヒズボラ兵舎への規制、イランからの志願兵のレバノン入国情をうけるなどしてきただが、一月二十三日を禁止する」決定を下し、レバニーズ・フォーシズのTV、ラジオのニュース報道が規制され、東ベイルートには、西ベイルートの新聞が入らなくなつた。右翼の声を代表するアンナハールですら、禁止された。

ファンジ党は、すでに、一月八日段階で、政治局、中央評議会、諮問委員会の合同会議後の声明において、タイフ合意に一定の評価を下したうえで、ホス内閣における「国民的バランス」をとつてからタイフ合意を実行すべきであること、そして、レバノンの救済は、「地方化」の拡大に基づくシステムの採用にあるとの立場を明確にした。これは、ジャジャの「連邦制」に連動する動きであった。だが、ファンジ党は、すでに、指導部の大半がレバニーズ・フォーシズの影響下におかれている。反アラブ・インシアチブを堅持して、孤立を深め、自滅するのか、アラブ・イニシアチブの流れに乗つて解決していくのかが、ファンジ党にも問われていたのである。

戦況としては、最初は、ジャジャ側から攻勢をかけていたが、アウンが反撃に転じていった。カラントイナ(ベイルート港北部) レバニーズ。

戦闘が開始されていくことになった。

アウンの展望する「分離」とジャジャの主張する「連邦制」は、タイフ合意の実行を確認するのか否かの路線上の相違としてあり、いずれ衝突は避け得ないものと考えられてきていた。ジャジャの一五日の演説の二日後には、アウンは、「ハラウイを大統領と表現するようなマスクミを禁止する」決定を下し、レバニーズ・フォーシズのTV、ラジオのニュース報道が規制され、東ベイルートには、西ベイルートの新聞が入らなくなつた。右翼の声を代表するアンナハールですら、禁止された。

ファンジ党は、すでに、一月八日段階で、政治局、中央評議会、諮問委員会の合同会議後の声明において、タイフ合意に一定の評価を下したうえで、ホス内閣における「国民的バランス」をとつてからタイフ合意を実行すべきである。

アウンの展開は、二月四日に、一二時間に及ぶ東ベイルートでの戦闘は、市民の大量疎開を生み出し、その被害は、東ベイルートの人民を巻き込んで、これまで、最大の衝突に発展している。さらに、東ベイルートのジャジャ側のTVに映されるのは、「西ベイルートとなら、いくらでも戦争をするが、なぜ、東で戦闘するのだ!」といふアウン軍の困惑した表情である。

一年前は、アウン軍に攻勢をかけられ、兵舎に撤退したジャジャ軍だが、今回は、政治、軍事的存在をかけた戦闘となつていて。そして、バカのイニシアチブで、停戦調停が何度も行われたが、アウンの拒否によつて成立せず、激化していく方向にある。

アウンの攻勢のなかで、ジャジャは、まず、仏帝国主義に介入を要請した。しかし、仏政府は、動かなかつた。なぜなら、仏帝国主義は、歐州・アラブ対話会議で、タイフ合意の実行に協力する態度を示したところであり、戦況からも、介入を控えたといふところであろう。

次に、二月五日に、シリア駐在の米国大使が、レバノンの全党派に対して、ハラウイ政権の支持、アウンへの退陣を呼びかけた。そして、ハラウイ大統領の権威を示すものとして、ワジントンのレバノン大使館に米シーケレット・サービスが入つて、レバノン大使館の統括権をハラウイ政府の代表に引き渡した。米帝は、反アウンの姿勢を示すことで、タイフ合意に対立する

○日から始まった右派内部の戦闘が激化していくなかで、「レバノン人民の防衛のために」と、セキュリティ・プラン実行に合意していった。

西ベイルートでは、レバノン国内治安軍、行は、南部の民族主義勢力、パレスチナ勢力の構造を、どのように変化させたか? イクリム・トップアーハの戦闘では、ヒズボラの巻返しに対してもアマルが、客観的には、アラファト派との連合を組む形になつていて、アマルは、再度シリアとの関係を修復したとされる。そして、ドルースのジョン・プラットは、「月中旬に、ドルース地区が、北部をアウンに、南部をアラファト派に替かされているとの発言を行つた。ジョン・プラットは、アラファト派の動きを、「再定着」の策動と規定している。さらに、ジョン・プラットは、アラファト派が、アウンに対するイラクからの援助のパイプ役を果たしているとして、アラファト派を非難している。アラファト派は、レバノンの安定化の過程において、存在基盤を再確立していくことをめざして展開している。

今月の南部レバノンの特徴は、シーア派の内部対立が小康状態になったこと、反イスラエル軍事闘争が拡大したことにある。二二日には、ファタハ革命評議会(アブ・ニダール派)が、「セキュリティ・ゾーン」で闘争を行い、イスラエル軍大佐を殲滅した。二五日には、DFL Pが作戦展開した。二六日には、地雷攻撃で、イスラエル兵が多数負傷した。二月に入つてからも、PLF(パレスチナ解放戦線)が領内闘

争を試みて、「セキュリティ・ゾーン」での戦闘を行つた。

西ベイルート内部に高まつて、軍事緊張が一挙に爆発した。それまでも、レバニーズ・フォーシズとファンジ党の幹部の暗殺、暗殺未遂(二月にはいつてからでも、三件)などを行つて緊張を高めていたが、右派内部のヘゲモニーを握るために、アウンが、東ベイルートでの「セキュリティ・プラン」の実行に着手したのである。

二九日に、アウンは、レバノン軍のみが武装することを指令した。これは、レバニーズ・フォーシズに武装解除を迫ることであった。ここから、現在も激しく行われている東ベイルート内部の

ことを避けたのである。

アウンの側は、二月四日に、一二時間に及ぶ機甲化部隊攻撃と砲弾幕をもつて(数千人の部隊が投入された)、東ベイルート北部のドバイヤのレバニーズ・フォーシズ根拠地(六兵舎)を襲撃し、ドバイヤを攻略したと報道した。しかし、ジャジャは、一兵舎のみをとられただけであるとして、それを否定した。ドバイヤは、東ベイルートとジュニエを結ぶ戦略地點である。この要所をとられると、レバニーズ・フォーシズの基地、ジュニエが危うくなる。こうして戦線が、東ベイルート北部に拡大された。

ジャジャは、さらに、北部に防衛戦を敷くことで、対決姿勢を強め、戦闘の長期化の様相が示された。ジャジャは、自らの拠点(ビブルスのあるジバイル区、東ベイルートの東北にあたるケスルワーン区)を軸に反撃しようとしている。

現在明確になつてるのは、アウン対ジャジャの戦闘の結果如何によつて、短期的には、東ベイルートのヘゲモニー争いの決着がつく可能性があるということ。それは、西ベイルートのセキュリティ・プランの実行と関連して、東ベイルートに君臨してきたジェマイエル一族の権益が、終焉することを意味する。これが、「新しい風」である。その内容としては、タイフ合意の実行方向に、東西ベイルートが向かうとい

この問題について、民族統一指導部は、未だ、直接的な立場を表明していない。しかし、アピール五一号にみられるように、入植村—「移民」の増大に対し、労働のボイコットの基本政策を堅持することを、呼びかけており、二重権力構造を強化しつつ、入植村の増大にみられる植民政策との対決を通じた戦略方向の実現という展開に発展している。また、エルサレムの右派リーダーと見られるファイサル・フセイニは、「このことは、社会主義諸国が、これまで、民族解放運動を支援する後方としての役割を果たしてきたのに対し、その役割が、構造としても縮小していく方向にあるということを認識し、それを、打ち破っていく方向を、政府レベルの支持に求めめるのではなく、人民の足場に立脚し、自力更正を軸に、人民同士の交流を通して、支えあっていく方向を示している。それは、シオニストが政治的孤立化に対して巻返しにでている時、これを、逆包囲していく方向を示している。蜂起の持久性を堅持するために、国際連帯の強化が行われており、実質的に、植民政策を打ち破つていくことが問われている。

シオニストの目的は、まったく同じである。当時も、ナチの弾圧を逃れ、「建国する」という口実をもつて、世界シオニズムが組織していくた。世界シオニズムは、ソ連、東欧諸国において、人権問題を云々するキャンペーンを行い、反体制勢力を支持し、ソ連、東欧の方向転換のなかで、資本を餌に、イスラエルの承認、ユダヤ人「移民」の自由化などを策動した。違うのは、前回は、人工國家「イスラエル」を作ることを目的としていたのに、今回は、「イスラエル」の存在の危機を克服するための策動であるという点である。そして、シオニズムの実体的形態としてのイスラエルに体する蜂起を中心とする闘いと、世界シオニズムによる国際的策動を暴露し、世界シオニズムによる策動の匂囲気に向けて国際世論を作り出していく必要がある。

世界シオニズムは、今回は、蜂起解体政策の一環として、現在の「大イスラエル」を防衛するため、組織しようとしている。この「移民」問題を、PLO抜きの直接交渉と蜂起解体といふ現在の政治展開に結び付けることで、より、政治的な孤立化を促進する要素となっているが、実体的には、「イスラエル」の存在の強化となっている。

アラブ民族主義はイスラエルとの共存方向を確認してきた。しかし、イスラエルは、アラブとの共存ではなく、イスラエルが占領している土地の維持を追求していることが、「移民」問題で露呈している。

オニストとの闘争を展開していく力を形成することになっている。それは、植民政策をめぐるシオニスト内部の対立、パレスチナ人民の蜂起の闘いによって形成されてきたイスラエルの孤立化をさらに計つていくために、アラブ民族主義としては、イスラエル包囲網を、政治的に、軍事的に、「入植政策」を契機に、再編、強化していくことが問われているといえる。

困難な問題は、ソ連、東欧の自国の改革を第一とする立場であり、それを利用して策動する世界シオニズムに対する闘争は、重要な意味を持つ。

アラブ・レベルにおいて、「入植政策」は、占領問題の継続と、再編の問題と連動するため、看過できないものとしてあり、それが、一定、アラブの統一した動きを作り出し、緊急アラブ・サミットで、方向を打ち出していくものとなつていくだろう。そこでの合意が、戦術的レベルにとどまるのか、シオニストとの対決に向かって一步を踏みだすかが、今後の動向の鍵となつていくだろう。

レバノンにおいては、ジャジヤ対アウンの戦闘が継続しているが、アウンが、タイフ合意実行を阻害している元凶となっている。その軍事力から、力によってアウンを追放していくことは、困難な状態にあり、今後アウン・レバノン軍への政治的包囲を強化しつつ、内部的に解体していく戦略展開が問われていくだろう。

一方、タイフ合意の実行は、セキュリティ・プランの実行をめぐる合意が、どういう形で、

オニストとの闘争を展開していく力を形成することになっている。それは、植民政策をめぐるシオニスト内部の対立、パレスチナ人民の蜂起の闘いによって形成されてきたイスラエルの孤立化をさらに計つていくために、アラブ民族主義としては、イスラエル包囲網を、政治的に、軍事的に、「入植政策」を契機に、再編、強化していくことが問われているといえる。

困難な問題は、ソ連、東欧の自国の改革を第一とする立場であり、それを利用して策動する世界シオニズムに対する闘争は、重要な意味を持つ。

アラブ・レベルにおいて、「入植政策」は、占領問題の継続と、再編の問題と連動するため、看過できないものとしてあり、それが、一定、アラブの統一した動きを作り出し、緊急アラブ・サミットで、方向を打ち出していくものとなつていくだろう。そこでの合意が、戦術的レベルにとどまるのか、シオニストとの対決に向かって一步を踏みだすかが、今後の動向の鍵となつていくだろう。

レバノンにおいては、ジャジヤ対アウンの戦闘が継続しているが、アウンが、タイフ合意実行を阻害している元凶となっている。その軍事力から、力によってアウンを追放していくことは、困難な状態にあり、今後アウン・レバノン軍への政治的包囲を強化しつつ、内部的に解体していく戦略展開が問われていくだろう。

一方、タイフ合意の実行は、セキュリティ・プランの実行をめぐる合意が、どういう形で、

うことである。それを窺わせるものとして、ジャが出した停戦二条件を挙げることができるだろう。その第一は、アウンが民兵解体指令を撤回すること、第二は、東ベイルートでの政治的自由の保証である。

逆に、アウンが勝てば、再び、タイフ合意の拒否として、新たな政治、軍事的な不安定化をもたらす要素となっていくだろう。

タイフ合意は、将来的な統一レバノンの政治的枠組みではあるが、当面の実現形態としては、西ベイルートに象徴的な統一政府が作られ、実態としては、各宗派のカントンが存続していく構造になるだろう。実態としてのカントン化と、その緩衝地帯としての、中央政府という構造が作られていくだろう。

次の段階のセキュリティ・プランの実行は、当面は、右派内部の戦闘結果と、実質的に進行しているカントン化を、どのような合意のもとに、実体化していくかにかかっていくだろう。当面の西ベイルートでのセキュリティ・プランの実行をもって、二月に、レバノン問題を討議する緊急アラブ・サミットが開催されていく方向にある。そこにおいては、西ベイルートに合法的権威が樹立されたことを確認していく可能性がある。カサブランカ・サミット段階との相違は、当時よりも、アラブ・イニシアチブを強力に推進する必要性が生じていることである。そこから、タイフ合意の枠組みで、レバノン・レベルでの安定化の方向が作られていくだろう。この時点での被害は、病院筋の発表によれば、

死者二六〇名、負傷者一二〇〇名にのぼる。ハラウイー大統領は、六日の時点で、シリアへの介入を要請したが、シリアは、動かなかった。これは、ハラウイーアサド会談での合意とは違う動きだが、右派内部の衝突に対しては介入せず、セキュリティ・プランの実行上障害にならない限り静観し、相互の力の衰退を見る方が、味方にとって、シリア包囲網の口実を与えることになるのを避けたためでもある。

イスラエルは、ジャジャに圧力をかけて、アウンとの同盟を行わせてきたが、東ベイルート内部の緊張が高まつていった頃、南部レバノンの「セキュリティ・ゾーン」を視察したラビンは、「シリア軍の追放のために、援助を要請されれば応える」との発言を行った。しかし、アウンもジャジャも、イスラエルに介入を要請することは避けた。そして、やはりアウンに肩入れしてきたイラク、アラファト派も、静観している。これは、勝つほうに肩入れしようというものであろう。

アウンは、ドバイヤでの一定の攻勢を背景に、七日に、五項目要求をつきつけた。それは、レバニーズ・フォーシーズを政党化すること、民兵は守備隊か警察に入ること、前線の民兵は軍の指揮下に入ること、タイフ合意反対の立場を表明すること、レバニーズ・フォーシーズを武装解除することであった。ジャジャは、アウンの五項目要求を一蹴し、戦闘の長期化に備える態勢明確化することを、レバニーズ・フォーシーズを武装解除することであつた。ジャジャは、アウンの五項目要求を一蹴し、戦闘の長期化に備える態勢明確化することを、

三 今後の展望

現在の東欧の再編の激動のなかで、ソ連系ユダヤ人「移民」が、イスラエルに大量流入していることによって、アラブ民族主義は、大きな影響を受けている。ソ連、東欧の改革の現状は経済的再編によって、活力をつけていくことに軸を置いており、それは、外資の導入を促進していくこうとしている。このため、「移民」の承認は、その一環としてあり、東欧の改革運動が、歴史的には、シオニズムによって支えられてきたことを背景にしている。東欧、ソ連が、イスラエルとの国交を回復していく動きは、基本的に、帝国主義からの（そのなかでも、ユダヤ資本）技術導人と、資本導人ということにあり、経済関係を第一にすることにある。これは、これまでのアラブ一辺倒の政策を変更していくことを示している。そのなかでの「移民」問題としてあり、政策上の反対にとどまらず、世界シオニズムの戦略構造と対決していくことが、アラブ民族主義には問われている。

世界シオニズムは、強力なユダヤ資本を背景にして（世界の金融を支配している）、経済的に困難な状況にあるソ連、東欧への圧力を加え、政治的に孤立していたイスラエルを援助するために策動しているのである。

アラブ・サミット前に、そして、アラブ・サミットを通して、新たな枠組みが作られるか否かに、かかっている。それは、また、カントン化を越える実体がない以上、現在的にそれを承認することが、前提となつた展開のなかで、前述したカントン化の実行方向と、中央政府の役割との関係が、どのように、構造的に各組織の要求を入れて作つていくのかが注目される。そのカントン化から、勢力としても、位置としても、不安定な存在としてあるヒズボラと、パレスチナ勢力の存在がレバノン民族主義勢力内部に矛盾を作り出していく要素としてある。

人々に反響を与えた大衆蜂起に立ち上がった。そして、被占領パレスチナ國の人間は、占領を拒否し、占領に抵抗し、唯一合法の代表たるPLOの下で独立國家を建設する決意を示した。

我が人民の大多数は、あたかも、一人の人間のように、革命を支持し、世界中の良心を持つ人々に影響を与えた大衆蜂起に立ち上がった。

パレスチナ人は、自らが最高の役割を果たさない限り、自らの運命を決定することはできないと認識した。

方々、自由のための殉教者の皆さん、自らの息子を失つた方々に訴える。皆さんは、今世紀始まって以来の偉大なる過程を前進している。パレスチナ人民の政治的、文明的存在に対して、肉体的抹殺から始まって、政治的抹殺に至る疑わしき解決策が強要され続けてきた。これらの陰謀は、多様な形態と方法をもつて仕掛けられたが、中東における矛盾の中心としてのパレスチナ人民の民族的要求を抹殺するという一つの目的を持っていった。「自治」とか、「民間政府」とか、パレスチナ人民の唯一合法の代表であるPLOに代わるものを作ろうという陰謀とかが、その最たるものである。

パレスチナ人は、安全を失つた。食物、未来、そして子供達に食べさせるものまで、脅かされている。こうして、生活水準はひどく低下し、基本的な公共サービス、とりわけ、水、教育、保健が、大変お粗末になった。パレスチナ人は、自らの祖国に存在していくための税金を払つた。あらゆる種類の拷問に耐え、占領者が次から次へと搾りたてる搾取に耐えてきた。そして、パレスチナ人は、自らが最高の役割を果たさない限り、自らの運命を決定することはできないと認識した。

我が人民の大多数は、あたかも、一人の人間のように、革命を支持し、世界中の良心を持つ人々に影響を与えた大衆蜂起に立ち上がった。そして、被占領パレスチナ國の人間は、占領を拒否し、占領に抵抗し、唯一合法の代表たるPLOの下で独立國家を建設する決意を示した。

パレスチナ人がパレスチナの問題を解決する責任を果たす時が来たということを証明している。誰かに解決を信託する時は終了し、パレスチナ人が果たすべき役割を否定する自論のみも、その自論のみを仕組んだ連中の全員が歴史のくずかごに放りこまれた今となっては、流産したの

人民の蜂起は、力強く爆発し、宣伝、精神面、経済面、政治面などあらゆる分野で敵に打撃を与えてきた。こうした結果として、敵を国際的に孤立させ、蜂起の側は、成果を積み重ねていった。その成果とは、ヨルダンが西岸との繋がりを切つたこと、パレスチナ独立國の宣言、国際的な承認を、パレスチナ國が受け続けていることなどである。こうした変化は、国際法にのつとつた国際レベルでの政治的配慮を促した。

殉教者、負傷者、追放された人々の長い隊列が勝ち取つたこの成果は、この寛容なパレスチナ人民が永年の奉仕、闘い、ストによつて、そして、現在のパレスチナ革命の勃発に繋がる武装革命によって、積み重ねたものである。それには、奇跡を実現するべく、勇敢な戦士達が、一九六五年の一月一日に開始したパレスチナ武装闘争の革命の火花が作つたものである。

この二十五周年を迎えるにあたり、パレスチナ人一人一人の心にとって大切なパレスチナ革命創立にあたり、我々は、パレスチナ民族解放運動一フタハの兄弟達、そして、パレスチナ人の大多数の皆さんに祝賀のあいさつを送る。

二五周年は、我々が成長したこと、そして、パレスチナ人がパレスチナの問題を解決する

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

「ソ連からのユダヤ人移民がイスラエルに行っているが、移民の自由を明記したヘルシンキ合

意遵守など、ソ連の側の動機がいかなるものであれ、我々の大義を害するものだと思う。理由はどうあれ、この移民は、シオニスト総体の力を増した。ソ連系ユダヤ人が、西欧へ移民することと、人種主義であり領土拡張国家であり、我らの母国を占領し、パレスチナ人を弾圧しているイスラエルに移民することと同列に比較することはできない」

— PFLP創立二二周年を記念する記者会見での発言。一九八九年一二月

イ、ムバラク大統領（エジプト）

「世界の変化に遅れないよう、アラブ民族の立場を早急に確かめ合う必要が出ている」

— 一月二九日、バグダットにて  
ロ、ハバシュ PFLP議長

② アピール五一号 自由と平和の呼びかけ

英雄的パレスチナ人民の皆さん。帰還、民族自決の権利、独立国家の実体化を達成するため、我々は闘争を堅持し、犠牲を払うことの確認する。それは、パレスチナ平和イニシアチブの断固たる堅持によって達成されるだろうことを、再度確認する。

我々は、パレスチナ人が自らの唯一合法の代表たるPLOに結集していること、PLOがパレスチナ代表団を編成し、それを発表する権利を持つていることを確認する。我々は、この問題については、いかなる委託も拒否するし、PLOが編成し発表しない代表団には、被占領地からは誰一人として参加しないことを確認する。どちらの代表団も、事前に議題を設定しないこと、そして、その交渉が、実行力のある国際會議に向けた一步として、国際的監督下で行われるべきであることを、パレスチナ人民は確認するべきであることを、パレスチナ人民は確認することも持っている。

敵イスラエルは、人種主義国家である南アフリカとの最悪の関係を持っている。さらに、最近暴露されているように、ノリエガとの関係も持っている。イスラエルは、「パナマに対する米の侵略についての我々の弾劾をもって」、最高の軍将校、つまり、ハリリを介して関係を持ったまし、コロンビアの麻薬ギャングとの関係をも持っている。

勇敢な皆さん。統一指導部は、モスクワのPLO代表を大使館に格上げしたソ連の決定を歓迎する。この決定は、PLOを無視し、パレス

チナ独立国の建設に反対する米に打撃を与えた。このソ連の決定は、紛争関連国のすべてが参加し、PLOも同等の資格で参加する実行力のある国際会議の開催を通して、パレスチナ人民が独立国を建設する権利を、貫して支持してきたソ連の原則的立場の明確な表明であると、我々は認識している。

PLO代表部に、未だ大使館の資格を与えていない諸国に対して呼びかける。ソ連の動きに続いてほしい。そして、イスラエルが、国際的な意志に従い、パレスチナ人民の合法的権利を受け入れるよう、圧力をかけてほしい。

東欧諸国の中に、イスラエルとの関係を回復する国々がでているが、統一指導部は、大変驚いている。そうした動きは、それらの諸国の人々と政府が掲げてきた民主主義と正義のスローガンに背反するものではないだろうか？民主主義と正義に立脚する国家が、他民族の土地を占領し、最悪の弾圧を行い、もつとも素朴な民主主義と人権すら奪っている国家との関係を改善することが、なぜ、可能なのだろうか？

抵抗する皆さん。パレスチナ人民の権利に対するイスラエルの行為を弾劾したアムネスティ・インターナショナルの報告書を、統一指導部は確認する。そして、国際的諸委員会、諸組織、真の友人たち、マスコミの国際的代表の皆さんに呼びかける。占領軍兵士どもと入植者どもが、行為を行っているのか、その事実を知るために、パレスチナ国の被占領地を訪問してほしい。

統一指導部は、シリア政府の兄弟達に呼びかける。同等の立場で、かつシリア、パレスチナ両国民の利益のために、PLOとの兄弟的関係を作つてほしい。なぜなら、パレスチナ人民の蜂起とアラブ民族が挑戦に直面している現段階では、我々總体が、最大の團結を作ることが必要である。この意味で、統一指導部は、シリア政府に呼びかける。善意の表現としてシリア政府が拘留しているパレスチナ人政治犯を釈放してほしい。

統一指導部は、PLOの枠組みにおいて民族統一を強化することが、大変必要なことであると信じる。それゆえ、PLOと決裂していたP.S.F（パレスチナ救済戦線）に対し、カリド・アル・ファームが、第一回PNC（パレスチナ国民會議）の決議の承認・遵守を条件にPLOの隊列への復帰を呼びかけたことを歓迎する。このPNCの第一の決議は、独立文書であり、パレスチナ平和イニシアチブであり、中央評議会の設置であった。

巨大な蜂起を担う英雄の皆さん。パレスチナ共産党の第八回創立にあたり、統一指導部は、あいさつを送る。パレスチナ共産党は、PLOに結集するパレスチナ勢力の主要な勢力であるし、統一指導部は、彼らの民族的闘争を展開する役割を評価しているからである。

寛容なパレスチナ人民の皆さん。蜂起の拡大、発展の必要性を確認し、統一指導部は以下を呼ぶべきである。

民族統一について 統一した民族教育の方法

統一指導部は、シリア政府の兄弟達に呼びかける。同等の立場で、かつシリア、パレスチナ両国民の利益のために、PLOとの兄弟的関係を作つてほしい。なぜなら、パレスチナ人民の蜂起とアラブ民族が挑戦に直面している現段階では、我々總体が、最大の團結を作ることが必要である。この意味で、統一指導部は、シリア政府に呼びかける。善意の表現としてシリア政府が拘留しているパレスチナ人政治犯を釈放してほしい。

統一指導部は、PLOの枠組みにおいて民族統一を強化することが、大変必要なことであると信じる。それゆえ、PLOと決裂していたP.S.F（パレスチナ救済戦線）に対し、カリド・アル・ファームが、第一回PNC（パレスチナ国民會議）の決議の承認・遵守を条件にPLOの隊列への復帰を呼びかけたことを歓迎する。このPNCの第一の決議は、独立文書であり、パレスチナ平和イニシアチブであり、中央評議会の設置であった。

巨大な蜂起を担う英雄の皆さん。パレスチナ共産党の第八回創立にあたり、統一指導部は、あいさつを送る。パレスチナ共産党は、PLOに結集するパレスチナ勢力の主要な勢力であるし、統一指導部は、彼らの民族的闘争を展開する役割を評価しているからである。

寛容なパレスチナ人民の皆さん。蜂起の拡大、発展の必要性を確認し、統一指導部は以下を呼ぶべきである。

民族統一について 統一した民族教育の方法

1990年4月15日 第54号 月刊 中東レポート

三、ガザ、エルサレムの皆さんに、とくに、呼びかける。偽のラベルを貼ったイスラエル製品がでまわっている。これに気をつけてほしい。イスラエル製品を売っている連中については、攻撃部隊の皆さんがあれうことを確認する。

また、屋台の商売をしている皆さんに呼びかける。統一指導部が指定した時間以外には営業しないでほしい。

四、勇敢な商人、商店の皆さんに呼びかける。占領軍の命令に従うのではなく、統一指導部が指定した時間に営業し、閉店しよう。攻撃部隊の皆さん、商人の皆さんを助け、防衛しよう。

五、獄中者、被逮捕者、そしてそうした方々の家族の皆さんに呼びかける。法廷が課した罰金の支払いを拒否しよう。支払った人々には、保障がないことを確認する。

六、皆さんに呼びかける。占領軍がどのような方法で強制しようとも、壁に書いたスローガンを洗い落とすのを拒否しよう。

七、教育は、強力なパレスチナ国家の建設にとって重要な要素なので、人民教育の再編を行う。八、イスラエルの獄中に囚われているすべてのパレスチナ人の皆さんに呼びかける。獄中では、民主的、かつ統一した眞の民族的な活動を仲間に認められる。

一〇、パレスチナ人民大衆を代表して、ツツ師の訪問、そして米国のジェシー・ジャクソン牧師の訪問を歓迎する。こうした訪問の意義を確認すると同時に、自由のために闘うパレスチナ人民との国際連帯を深め、そして、イスラエルのデマ、弾圧、テロを暴露する重要な機会としてほしい。

一一、一九四八年に占領されたパレスチナに住むパレスチナ人民大衆の皆さん、そして、占領されたゴランに住むシリア人の皆さんにあいさつを送る。皆さん、蜂起二周年に連帯して勇敢な立場に立ってくれたことを感謝する。

一二、クリスマスを迎えるにあたり、キリスト教徒の皆さんにあいさつを送る。パレスチナ人民が直面している状況を考慮して、クリスマスの行事だけにとどめる決定を下したキリスト教聖職者の方々を、高く評価する。

皆さん、統一指導部は、次の行動を呼びかけます。

一二月二六日から三一日までは、パレスチナ革命開始二十五周年を記念して、あらゆる手段で闘争を拡大しよう。

一九九〇年一月一日は、パレスチナ民族解放

パレスチナ国歌を歌おう。正午一二時ちょうどに、あらゆる車は、一分間、警笛を鳴らそう。  
一月四日は、イスラエル製品をボイコットする日。イスラエル製品に偽のラベルをつけて売っている連中を追跡しよう。

一月六日は、東方教会のクリスマスなので、商店の皆さんは、夕方五時まで営業してほしい。

一月七日は、パレスチナの聖地に対する攻撃に抗議して、教会から無言のデモをやろう。

一月九日は、蜂起の開始を記念する恒例の闘争として、ゼネストの日。この日は、統一指導部の結成記念にもあたる。

一月一〇日から一六日までは、アンサール III キャンプに囚われている勇敢な人々との連帯の日。デモを行おう。息子を囚われた母親の皆さん、この日は、デモをやろう。

一月一七日は、米国の政策を弾劾するゼネストの日。パレスチナ人民の権利に敵対するイスラエルを支援する米国を弾劾しよう。

一月二〇日は、学生の皆さん、大学や学校に行って、教育を受ける権利を要求するストライキをプログラカードに書いてそれを掲げよう。

一九八九年一二月二五日

ようにしよう。

同志で作り出そう。

運動一アタハの闘争開始、パレスチナ革命勃発を記念して、大きな闘争の日としよう。大衆デモをやろう。パレスチナ旗を掲げ、スローガンを書こう。向敵者の墓地にむけ、一行き

によって、さらに、眞面目な討議を重ねることによって、相違点ではなく、一致できる点を探し、分裂の態度を完全に打ち碎いていく必要性を確認する。そうして、強力に合って、パレスチナ人民が祝う民族的記念行事に対する民族的態度をとろう。

(ハ)マス(イスラエル抵抗運動)について、ハマスに結集する兄弟達、ゼネストの日を含めて、民族的活動を展開する日程を調整しよう。

学校と学生について 新学年度の開始にあたる、全教師の皆さんに確認する。二倍の努力をもって、学問的、教育的、文化的活動を行おう。

学生の皆さんのが失ったものを見直して、保障していくためである。

統一学生委員会を結成するために、学生の皆さんには、教師を尊敬し、教師に協力し、学校の理事会と共通の回路を作りだそう。

包围に對して 集団処罰、長期外出禁止システムの発動を基本とするマルダハイの政策を破壊させる必要性を確認する。そのために、可能な限りの手段で、どの家庭でもあらゆる種類の食料を最低一〇日分は備蓄しよう。そして、共同の衛生委員会を編成して、負傷者や患者の手当を行い、薬品を備蓄して間に合うように配布すること、衛生の指導、初步的な看護についての訓練を行うことが必要である。

ナブルスの中央市場について 地区の農業生産を支援すること、そして、ナブルスの市場の状況を考慮すると、西岸での農産物の主要な取引場所としては、ハスベが敵している。指定した労働時間外であろうと、ハスベでの荷物下ろ

年を記念する日。ゼネストの日としよう。

一月三一日 我々の唯一合法の代表であるPLOへの結集を示し、交渉に臨む代表団の編成、発表がPLOの権利であることを確認することを示す日としよう。

二月九日は、蜂起が二七ヵ月目に入るのを記念する日。敵の軍事的指導者どもが、蜂起の軍事的壊滅を再度選択したことを宣言しているのに対しても、我が人民の決意を示す日。二年間の蜂起の闘いで経験を積み、パレスチナ平和ニシアチブで武装した我が人民は、政治的であるが軍事的であろうが、敵の蜂起解体の策動を打ち破る能力があることを示そう。

イスラエル製品を売りさばこうとしている。二月一二日から一五日までを、攻撃部隊が、イスラエル製品を偽って販売する連中を追跡し、それらを没収する「闘争の日」とすることを、宣言する。

我々統一指導部は、攻撃部隊の皆さん、および、各地域の民族指導部に呼びかける。これらの行動計画を守り、町、村、キャンプで、自らの条件に合わせて、上領に對決する闘いを行おう。我々は、必ず勝利する。

一九九〇年一月二〇日

パレスチナ国にて

PLO・統一指導部

軍令一二九三を失敗させること 民族スローガンを壁に書いたすべての家に対しても罰金刑が、この一二九三号の目的である。個々のパレスチナ人を潰すためである。このような罰金の支払を拒否し、集団的にこれに對決していくことを確認する。そして、大勢でスローガンを書き、政治参加に動員し、健全でみつともないスローガンを完全になくそう。

攻撃部隊について 攻撃部隊の皆さんにあいさつを送る。人民の意見を聞き、人民との間に、敬愛と暖かな関係を作るようしよう。諜報活動のためと称して人々の車を接收、使用したりするような疑わしい行為をする者、敵のスペイとして動く者、攻撃部隊の名声を汚し、闘争にかたる者に対して、統一指導部は警告する。

UNRWA(国連難民救済機関)について 最近、キャンプにおいて、我が人民の子供達の食料が盗まれていることが暴露され、発表されたが、これに対してUNRWAの職員がなされたすべての措置に合意する。そして、封鎖下に置かれた村々に対してもUNRWAの援助がなされるよう期待する。

占領犯罪について 占領犯罪の日付を文書に記録している機関や、すべての人々にあいさつ

し、荷物作りを許可することを、確認する。トルカラムの裁縫工場と制作所について、民族的生産現場における八時間労働制が、トルカラムの裁縫工場や制作所でも適応されることを、統一指導部は確認する。

シオニストの入植村での労働について シオニストの入植村での労働ボイコットに関するこれまでの決定を確認する。とりわけ、これらの入植村が、新しい移民の居場所を作るために建設されたことを見ても、ボイコットを継続しないことを確認する。

攻撃部隊について 攻撃部隊の皆さんにあいさつを送る。人民の意見を聞き、人民との間に、敬愛と暖かな関係を作るようしよう。諜報活動のためと称して人々の車を接收、使用したりするような疑わしい行為をする者、敵のスペイとして動く者、攻撃部隊の名声を汚し、闘争にかたる者に対して、統一指導部は警告する。

逮捕された人々との連帯について より良い生活を目指して闘い、非人間的な弾圧に抗議し、その結果として、シオニストの監獄に囚われた

我が英雄の皆さんとの闘争を支持する。

統一指導部は、一九九〇年一月二二日から三〇日までを、逮捕された人々との連帯週間とすることを宣言する。次の行動を達成しなくてはならない。デモ、祝い、国際赤十字社、月三日月社(パレスチナの赤十字)の前で座り込むこと、そして、外国の領事館の前でのデモ。さら

に、逮捕された人々の家族を訪問すること。

植林週間にについて シオニスト入植村が癌細胞のように増えていくことに対する、統一指導部は、二月の第一週目を、農耕作業と植林の週間と宣言する。山岳地域も含めて、すべての土地に植林をしよう。

一月二〇日 パレスチナ共産党の創立第八周

何よりも、自己規律は、内省的な運動ではない、自らの対立物、すなわち占領に、直接対決していく増殖のなかで、パレスチナ国家を打ち

（ハ）パレスチナ独立国は、大衆が権力を作り上げ、闘争における行動の統一を達成することにより、パレスチナ民族の大地に建設されつつある。この独立国は、不退転の、そして断固たる対決を行うパレスチナ民族運動の確固たる土台を据えた――アビール三六号

一九八九年三月十五日 民族統一指導部  
デモクラティック・ペレスタイン三九号（一）  
九八九年一二月号）

パレスチナ蜂起の二年目の特徴は何か？ パレスチナの側から見たら、殺害、蛮行が多かったということになる。しかし、八九年は、インティファードの最初の年の再来以上だった。八八年の主要な成果は、包括的な統一、動員、人民権力を作ることを獲得したことであった。これに比べて、八九年の成果は、持続する戦闘性と、八七年にインティファーダが開始されて以来始まつた社会経済的枠組みでの新しい生き方を統制する意識的な組織化とを結合したことである。これは、蜂起の第一年の前進の論理的な発展として、面している蜂起を拡大し堅持していくことを要求している。

パレスチナ蜂起の二年目の特徴は何か？ パレスチナの側から見たら、殺害、蛮行が多かったということになる。しかし、八九年は、インティファードの最初の年の再来以上だった。八八年の主要な成果は、包括的な統一、動員、人民権力を作ることを獲得したことであった。これに比べて、八九年の成果は、持続する戦闘性と、八七年にインティファーダが開始されて以来始まつた社会経済的枠組みでの新しい生き方を統制する意識的な組織化とを結合したことである。これは、蜂起の第一年の前進の論理的な発展として、面している蜂起を拡大し堅持していくことを要求している。

パレスチナ国家のプロフィール  
八九年は、内部規律建設を集中的に行つたが、大衆的戦闘性の劇的な発揚に欠けたわけではないかった。一月には、大衆の公然の反抗の結果、ガザの警察署を閉鎖せしめ、東エルサレムの住民は、パレスチナ人の候補者を立たせて選挙させようと画策したイスラエルの動きにもかかわらず、イスラエルの地方選挙を成功裡にボイコットした。

イスラエルの新聞は、インティファーダが急進化していることに対するシオニストの恐れが拡大していることを反映した。三月二三日のハレツ紙で、オリ・ニールは、パレスチナ人青年がイスラエル兵士に面と向かって対決していく直接対決が増えているとし、ナイフや手斧に

占領下でのパレスチナ人の闘争の統一は、これが、蜂起を可能にした第一のものであるが、八九年を経て、大変強まった。パレスチナ平和攻勢に関しては、P.L.O.の戦術をめぐって意見の相違はあったが、主要な政治潮流は、蜂起の枠組みの中で統一を堅持した。二月、行動の統一を保証するために、統一指導部とハマスの連携関係が作られた。また、大衆運動の統一に向けた動きも、同様に意義がある。八八年の末に、被占領地の諸婦人組織が調整評議会を結成したのが、その先鞭となった。八九年一月には、被占領地の作家組合が再統一された。その後、諸学生組織、労働者委員会の高等評議会が結成されていった。高等労働者評議会は、労働組合連合の分断の状況を補うばかりではなく、八九年の闘いにおいて、主要な戦闘の前線となつたのである。ガザ住民に対する新しい身分証の強要に対して、ガザの労働者が長期のストを闘つた

## 強化された紡 占領下での

テムを作ろうとする努力に、占領当局によるさらなる野蛮な対応に直面した。自宅授業や、学外学習プログラムで教育していく教師や、市民は、ハラスメントに曝され、逮捕された。統一指導部の指令に従い、人々は、独立にむけたさらなる発展段階として、シオニストの司法システムが押しつける罰金の支払いを拒否した。また、八九年には、適正な手続の欠如に抗議して、パレスチナ人弁護士は、二ヵ月間の法廷拒否闘争を行った。

ので、ハレブチナ人を分離し、カザハスルに支配を再確立することによって、被占領地の支配を再建しようとしたイスラエルのもつとも長い攻撃との対峙になつた。

統一強化の努力は、繰り返しシオニストがかかる攻撃を撃退するのみならず、亡命中のP.L.O.に対しても、諸機構内部の民主化、集団的指導、活発な勢力に比例する代表の派遣というやり方の模範を示すことになつた。これは、シオニストの挑戦に対決する鬭いと同様の重要な環となつた。八九年に、民族的諸機構と組合は、執行部の任期切れでもかからず、大量逮捕、

が、破壊、殺人、砲撃という数カ月前の状態に  
もどることになる。

第三に、「トロイカ」が結成された当時、ア  
ラブ、国際レベルで、希望が寄せられていた。  
「トロイカ」が夏に停止された時には、レバノ  
ン、アラブ、国際レベルで、再開の要求が高まっ  
た。先程述べたような新しい障害の最大のもの  
は、アウンの反対派的、反抗的な態度である。  
事態の深刻さに注意を払ってほしい。そして、  
障害の除去を援助してほしい。

三週間に及ぶシリア派の内部対立は、レバノ

●レバノン問題資料

アラバ「ナロイカ」 聰明桂風一郎、田畠

アラブ「トロイカ」声明並（一用）五田

第一に、レバノンの全勢力と共にし、少なく

ない成果をあげた。戦闘は終決し、海上封鎖は

ない成果をあげた。華閥は総決し、海上封鎖は解除され、この。合法的機関が作成、再開した。國

解除された。合法的機関が昨日、再開した。国

障害と問題が存在し、これまでの成果を払拭する  
第一に、遺憾ながら、こうした前進に対する  
国際的な支援を受け、レバノンの兄弟達は、アラ  
ブの兄弟達との共同のもとに、平和達成にむけ  
た活動を行う条件ができた。

ドを作ったりすることなどについて、「占領地での先週、もしくは、過去二週間の諸事件は、蜂起の開始後の数ヶ月に起きた様々な方法を彷彿とさせる」とも記した。彼は、「ガザの物理的統制は、人口密集地区に外出禁止令をしてのみ、可能である……それでも、外出禁止令破りによる騒動は起こる」と認めた。

隔週のアピールによって、統一指導部は、大衆が現実的に実践できるレベルに闘いを堅持する計画を打ち出した。秋には、身分証強要に対する闘いのために、ストの日数が増やされたが、八八年にくらべれば、劇的な増加にはならなかつた。事実、強調点は、直接対決に置かれ、統一指導部は、殉教者が出たら、ゼネストをするのではなく、それを合図に占領軍への攻撃を増やすよう、訴えた。喪に服する殉教者の家族に対する当然の尊敬として、殉教者の地区を除いて。統一指導部は、当局の逮捕者リストに挙げられた人々に対して、逮捕に屈するより、地下に潜行しようとした。こうして、地下の部分が拡大した。彼らは、パレスチナ国家のなかで、西岸、ガザの半解放区において、非常に尊敬される市民となっている。

拒否したために獄死したのだった。これは、エルサレムで行われたデモのうち、六七年以來、最大規模となつた。

一月五日、ベイト・サフールでは、喜ばしいことがあつた。三〇〇〇人の人々、パレスチナ人住民と、代表団来賓とが、税金戦争で村が勝利したことを祝つた。ベイト・サフールの村人は、六週間の軍事封鎖をはねのけ、占領には納税しないという立場を貫いた。ハラスメントを受け、ぶちのめされ、逮捕され、税金の数倍に相当する八〇〇万ドルもの個人財産を没収されつつ鬪い抜いたのであつた。

統一指導部は、イスラエル製品、税金、民間行政府に対するボイコットという総体的路線を堅持する一方、地域の農業と手工業の強化に努めた。八九年のアピールは、社会経済生活の規制に力を注いだものとして、特徴がある。貿易ヨルダン・ディナールの切り下げと物価上昇に合わせて、労働者、被雇用者の賃金を上げることも訴えた。パレスチナ人労働者と雇用者との労働争議を調停する民族委員会が設立され

による攻撃件数を挙げた。さらに、イスラエル兵士から火器を奪取したガザの事件を例にとつて、「(インティファーダ)が」アルジエリア型に似ていくにつれ、実弾での攻撃件数が増える危険性が増している」と、書いた。そして、デモを行ない、タイヤを燃やしたり、投石したり、バリケード

呼ばれたオマル・カーセムの葬儀に、東エルサレムで一万人の参列者が出席した時、イスラエルの新聞は、まるで、東エルサレムが、「パレスチナの首都」になったかのようだと報道した。カーセムは、イスラエル監獄におけるもつとも長期の政治犯であり、イスラエルが彼に治療を

た  
〇

品しか売れなくなつた（イスラエル銀行による  
と、イスラエルは、六七年の占領地に対する買  
易黒字は、八七年には、一億七四〇〇万ドルで  
あつたが、八八年には、五六〇〇万ドルに落ち、  
八九年には、さらに減少するだらう）。民族市  
場を二つの方向で拡大する努力があつた。四八  
年ライン内に居住するパレスチナ人は、西岸、  
ガザの製品を買うよう、そして、四八年ライン  
と六七年ライン内に居住するパレスチナ人は、  
ゴラン高原の生産物を買うように奨励されたの  
である。

税務署が攻撃をうけ、税務署の書類が焼かれ、  
ボイコットに応じない会計士は商売ができなく  
なるなどの戦闘的な行動が、この規制を強化し  
た。また、占領当局の禁止命令に反抗して、占  
領軍が倒壊させたパレスチナ人の住居の再建を  
行う再建委員会も組織された。

創出された新しいシステムの象徴は、イスラ  
エルが設定したのとは別個に、パレスチナ国の  
夏時間が宣言されたことであった。独立の象徴  
的なこの表明に対し、占領当局は、占領軍に  
時計を破壊して回らせるなど、激しい反応を見  
せた。この一年間、学年度中のほとんどが学校  
閉鎖を受けたため、オルタナティブの教育シス

がれない事態はたゞしているそれは、レバノンが、破壊、殺人、砲撃という数カ月前の状態にもどることになる。

第三に、「トロイカ」が結成された当時、アラブ、国際レベルで、希望が寄せられていた。「トロイカ」が夏に停止された時には、レバノン、アラブ、国際レベルで、再開の要求が高まつた。先程述べたような新しい障害の最大のものは、アウンの反対派的、反抗的な態度である。事態の深刻さに注意を払ってほしい。そして、障害の除去を援助してほしい。

三週間に及ぶシーア派の内部対立は、レバノンの統一を脅かし、和平に向けた歩みを危険に曝している。

第四に、「トロイカ」は、合法的機関が、こうした状況に対応していく努力を支援する。



## 重要日誌

- 一九九〇年一月一日  
（月）
- ・西ベイルートとトリポリで、車爆弾。
  - ・トルコ、一ヶ月間、イラク、シリアへのユーフラテス河の水を止め始めた。
- 一月一五日（月）
- ・ヨルダン国境での銃撃戦。イスラエル兵一名を殲滅。
  - ・南部レバノンから、イスラエル北部へのカチューシャ・ロケット攻撃（約二ヶ月ぶり）。
  - ・アルジェで、アラブ「トロイカ」外相会談。
  - ・アウンの報道規制で、東ベイルート内での報道は、アウンの独占になった。
- 一月一七日（水）
- ・アイネ・ヘロワ・キャンプで、アラファト議長の代表が記者会見。ヒズボラの「テロ」「人質拉致」非難。
- 一月一八日（木）
- ・イスラエル、南部レバノンで、PLO放送局などを爆撃。
  - ・東ベイルートで、元レバニーズ・フォーシズ幹部暗殺。
- 一月二〇日（土）
- ・被占領地で、アピール五一号発表。

・ハラウイ大統領初の外遊で、シリア訪問（二三日まで）。

一月二二日（月）

・南部レバノンの「セキュリティ・ゾーン」でFRC（アブ・ニダール派）がイスラエル軍と戦闘。イスラエル軍大佐一名殲滅。

・マグレブ連合サミット。

一月二十五日（木）

・ヨルダン－イスラエル国境で銃撃戦。

・南部レバノンで、DFLPが対イスラエル戦。

・イスラエル、サイダを空爆。

・東西ベイルート間の戦闘。

・アマル対ヒズボラ戦闘（西ベイルートと南部レバノン）。

・被占領地パレスチナ、ソ連系ユダヤ人「移民」に抗議して、ゼネスト。

・ハラウイ政権、西ベイルートへのセキュリティ・プランの実行決定。

・東ベイルートで、元フランジ党幹部暗殺未遂。

・ヒズボラ、西ベイルートでのセキュリティ・プラン実行に合意。

・蜂起二七カ月目に入る。

一月二六日（金）

・ベリ、ジョンプラットが、セキュリティ・プラン実行協力を表明。ヒズボラは、批判。

一月二七日（土）

・アマル、アルジェリアの仲介を受け入れ、ヒズボラとの停戦宣言。

・西ベイルートで車爆弾。シーア派の宗教的リーダーのシャムスディーン師暗殺未遂。

一月二八日（日）

・東西ベイルート間の戦闘。

一月二九日（月）

・ファランジ党首サアデ、ホス内閣を辞任。

一月三〇日（火）

・西ベイルートの大統領官邸に、RPG射ち込まれる。

・アウン、西ベイルートへの水、電気カットを恫喝。

・東ベイルートで、アウン対ジャジヤ戦闘開始（以降、激戦継続）。

一月三日（土）

・南部レバノンからの領内作戦。PLF（アブル・アッバース派）、「セキュリティ・ゾーン」でイスラエル軍と交戦し、部隊戦死。

一月四日（日）

・エジプトのイスマイリアで、イスラエルの観光バス攻撃。

一月五日（月）

・ヒズボラ、西ベイルートでのセキュリティ・プラン実行に合意。

一月九日（金）

